

芭蕉翁詩句諸抄大成

三

言	66
號	
冊	3

中村俊定文庫

文庫 18

809

3





蕉翁發句菫堀初編卷之三

秋之部

セウヤ 秋 風 きて しの ぬる 秋

赤冊子云梅丸曰萬菴星夕詩 天上星辰多契溜
世間、時序易ニ蕭條ナリ後の物あはれニかあリ

そふふニこころニこころニバ 浦 一 箱 含 羽 杉 風

叶向小文庫は杉風とあり花雀が句選に泊船集といふ



と雖も又評林の曾らに於て的流ありや

和

洪のふ星も旅の居や此の上 翁

是のたれもの程よいつる海思小町さびしきとぞうと我
かの清和をとあはれし

るのしんしん我を養ふかたき哉 其角

和

藤にのつとと飯喰ふ男了於 翁

け二句を晋ふらみか 粟よんてうろをいぬは唱和の二拾

とふ一し和音も世例あり源順の和万葉等ひたし

幕の句は解 去身曰云 養太曰云 藤岡曰云

け終中程の母や 養太

ひとあくと程ありや 養太

直危子曰程より程は保のあふあふ又俗にまじりたど

ふまかしくあふ

世はすく山入る程の山とて

程のき時をいひたけし

梅丸曰今此句は尋く同くそねば...
句はけり...
句はけり...
句はけり...

秋の夜は歩...
...
...

源氏物語の...
...
...

除く...
...

葉の後大根の外...

屈氏カ離騷經朝飲木蘭之墜露夕歠食秋菊之

落英注始也服子遷詩欲餐取菊離騷

瘦足飽蹲鳴山下肥元

元稹詩不是花中偏愛菊此花盡後更無花
初句ハ片回何...
...

...
...
...

相の...
...

支乃曰古歌載入の句法云梅丸曰夏乃集

まを展かすまていしし居しは

今そ鳴ある秋意方のし

夕さ水と静色の秋風あふ

影鳴ある深き此里

俊成

此一首と秀と相との言とんる下

方及清水の葉店甲左あつ

松尾の秋紙えくく秋意あ

晋阮籍詩 廻風吹四壁寒鳥相因依周尚衝服

望亦念飢イニ松風やあ又師走代日云

此道やい人あに秋の

人あや木のしら帰る秋は

歩中曰云赤丹子曰は二句いつまう人あに後

い人あにいあふはあし思ふあ歌とつあ

あし 梅丸曰 楚辭 廓落兮羈旅 而無友

生 阮籍詩 羈旅無疇匹 俛仰懷哀傷 所

思の歎とく應せり

あゝ〜〜日多〜つまぬるも秋の風

都因巨翁の語よけ秋風か身より正夕の信あり
 あゝ〜〜日多〜つまぬるも入果く風ぞ〜〜肌よぬ
 る爰は旅人の涙あ〜〜しや 支那の回玄妙此切云
 按九回細乃加州の下小途中の所とあり 新古今集
 旅人の袖吹くも秋風中
 夕日さび〜〜さ山の棧
 定家

柳舟の白日を合ひつゝをそぬる山陰は光りのねと白く
 わ〜〜え〜〜に〜〜すき〜〜〜〜〜雲の〜〜ふひ〜〜〜〜あ
 つまぬ

陶潛辭 舟揺〜〜以輕颺風飄〜〜而吹衣問征夫以
 前路恨晨光之熹微たら 阮籍詩 灼く西頽日
 餘光照我衣 謝靈運詩 杳く日西頽漫く長
 路迫 明袁凱詩 西風吹上漢臣衣 李樊龍詩
 秋風西北起吹我游子裳 又日清吹生衣袂 鮫
 陰散馬蹄 王世貞詩 秋風吹將暮 古道行跡

稀愛此微陽色射我霜中衣
物茂歸詩
蕭蕭比自落木歷幾晴巒九月征衣薄
千山
秋日寒郷心何廓落鳥道自艱難

自讚和歌集

定家卿

いけとふあまひき宿とくち夜

目も夕くら水の浮れ嵐よ

古今集

壬生忠岑

まぬのはほほ形くみりけり

あえりくくきとものまあ

九月の暮あけ 秋の夕は水たぐ入るくうりきあまこいづ
ま実院のひかるとへー かなける清歌どもひてかく
けりけりさゆれす只此のまはるはあまこいづ
しんじかーあつるこまはあまの風物まま入るあつる自然
はかこ古歌古詩等とあまこいづあやつるあまのこいづ
はあつる自然のあまこいづ今け自然のあまこいづあまの
古人のあまこいづあまのあまこいづあまのあまこいづあま
あまのあまこいづあまのあまこいづあまのあまこいづあま
あまのあまこいづあまのあまこいづあまのあまこいづあま
あまのあまこいづあまのあまこいづあまのあまこいづあま

是と簿と眞の句法風雅の骨あるものし嵐雪回る秋
の流石を多外はあり是所は生涯二之を兼て考證し
云揚尾田祖翁は絶唱多し是も絶唱の中(絶唱
あるも)

加洲一笑の墓は訪る

塚もろくげ秋風を吹く秋の風

眞の句と一笑の信厚きようけはあり其(用う
雑沓集と後また此句の字々小魂のあきつては

成るん 古今集よ

秋あけを山守^{トヨム}まき形(庵中)

我れも〜名や指ぬる夜に

元政の道記よ 天竺は海への舟はあつて是(あひ上
人のも成るや泪のほろふきよおの心はわとあはれ
く中〜口惜あ〜いん〜歌〜

いかに成るも〜形〜あ〜川の川

河^{ミナ}ほろ〜しては思あ〜は

懐^ニ老杜^ヲ

伊は汝のくもる船歌すは誰まそ

古雅辭之 工部詩 老去悲秋強自寬興未
今日盡君歡羞將短髮還吹帽 尚且あり

船海棠為仇の色よ嘆きあり

支乃曰先生海あり湖南の曲お平まうはれり
禱のありは此系の嘆きありは汝の船中句は
と海一きき舟とそけ句汝にいけしき

孫九回そ色の似るは元より西施の西はあふ西施の脚
是や海は諧謔體とて一或海空戯體とて八千
息の一失ある一丸荷もいれ信と道の高し辨
せざる事あり

本曾の掾海世のしとれ士と後我

徂来先生峡中紀は海上は曝くも孫実とては
東都執綰子よとけせんしとるよ本曾とては
大は索田省吾よとて事あり 丸曰物子與蕉

和^ハ晋^シ子^カ堂^ラニ^ニ地^ハ喰^ハク^クヤ^ハハ^ハニ^ニ一^一紐^ノの^ノ喜^シ為^ニ日^ハ喜^シ
 血^ハク^ク紐^ノの^ノ滋^シ凡^ハ我^レク^クシ^シ其^ノ角^ノの^ノ自^ラ地^ハ喰^ハク^クヤ^ハハ^ハニ^ニ
 老^ク以^テ今^ノの^ノ喜^シを^シ解^ス思^ハ合^ス之^レ為^ニの^ノ以^テ滋^シ凡^ハ天^ハ子^ハ
 又^ハ敵^ハふ^ル一^一志^ハふ^ル一^一門^ノ人^ノの^ノ中^ノ才^ハ終^スと^シ句^ハ秀^ク虎^クと^シ
 之^ノ其^ノ角^ノは^ハ比^シ肩^ヲ那^リ一^一之^ノ角^ノや^ハ弱^ク時^ハと^シか^ハ一^一襟^ヲ
 と^シ挑^ク之^ノ角^ノは^ハ月^ハ英^ハ此^ノ中^ノは^ハ一^一の^ノ樂^ハ一^一と^シある^トし

全昌寺庭中の柳ちりま

庭掃くくむぐや寺ホコ女柳

全昌寺ハ加賀の大聖寺とある寺と 莫^ク太^ク日^ハ云^ハ梅^ハ凡^ハ日^ハ北^ハ
 一^一け^ハ句^ハ又^ハ寺^ハあ^ハく^ク一^一字^ハ眼^ハと^シ郭^ハ林^ハ宗^ハが^ハ故^ハ寺^ハよ^ハら^ハく^ク一^一わ^ハ一^一次^ハ
 一^一と^ハ一^一須^ハを^シ長^ク者^ノの^ノ故^ハと^シ一^一須^ハ達^ハ毎^ハ朝^ハ逝^ク多^ク林^ハは^ハ往^ク一^一寺^ハ因^ハ
 の^ノ地^ハと^シ掃^ク除^クと^シ或^ハ日^ハ他^ハ寺^ハよ^ハら^ハく^ク一^一寺^ハよ^ハ入^ル一^一と^シ世^ハと^シ
 一^一小^ハ世^ハ依^ハの^ノあ^ハら^ハ一^一起^ル一^一帝^ハ釋^ハ天^ハ重^クと^シ一^一香^ハ解^ハ山^ハと^シ
 一^一等^ハと^シ一^一と^シ一^一事^ハあ^ハく^ク一^一志^ハあ^ハく^ク一^一に^ハ時^ハ中^ノ天^ハ帝^ハに^ハよ^ハは^ハと^シ一^一親^ハ
 一^一知^ハ一^一一^一便^ハ多^ク解^ハ山^ハと^シ一^一事^ハあ^ハく^ク一^一上^ハお^ハけ^ハ一^一等^ハの^ノ輕^ク軟^クある^ト事^ハ終^ス
 の^ノど^ハ一^一一^一あ^ハら^ハ一^一五^ハ百^ハ中^ノあ^ハら^ハ一^一佛^ハあ^ハら^ハく^ク一^一爾^ハ時^ハは^ハ佛^ハ自^ラ
 一^一事^ハと^シ一^一取^ル一^一掃^ク一^一志^ハあ^ハく^ク一^一一^一舎^ハ刹^ハ佛^ハ同^ハ建^ス河^ハ部^ハ加^ハ比^ハ宗^ハ等^ハ

のち才子是以んくも所くも等と執てたよ國母と授ふ
 佛及び才子能掃地じく食堂よ入於座する時佛
 掃除の五功治と説く事毘奈耶雜事よんいふ論
 佛頂の才子あはせかざる事あざるやあるべきけ國母
 自じのあるゆあり

此と篇よ藤堂侯の伝ありて武事小鍊せりハ勿痛
 風雅の考なり是とすく後如奇連能ハ天子吟篇よん
 傳ハ儒と伊藤坦菴等のそ在世の名傷よ交り尚其
 門は居士系事あり佛法ハ仏頂より浮瓶せりそ其法

佛ハ一末世の人たのが哭の小あるとんく病と疑ふく處

尼後及後誦きハく水と流すの秋

示瑞日け句と蟋蟀の句法とんく切る心を後身視觀
 察の之取かてんきく詞を揮くく初て影なき旅を
 七月在野八月在宮九月在戸十月蟋蟀入我牀下と
 いふ法ありて揮る亦よ心法解とこもよ事ハ此のま
 ちるも後身すし清きハあつとんくいとまのまこと
 らうとぬく回意ありん 梅丸回初經七月篇ハ予

の句後舟と着有破——山風建之の歌は親と云梅丸回
 此解是は似し詠あり茂宗回句意ハ出段鼻と突大
 出る杭打る九回是と句とす——羊素う若を不
 及とる——芳山回意中し動く云九回詠は句
 のげますする此後詠は——又及の(廿五)り
 あや——心ふるは果しそ支る歌が遊せ——素丸
 が詠又之——又ハ梅はらう——しあり今とらば又
 げハ木槿モウキし考ゆと木槿モウキの略とそと音讀イニし
 和語ハ例あり或人そくの花は使つる歌はけ辨る

とふらげとふ角——とくふらうとら

二國の事や一際此羽美小恙ハ

赤冊子回は句ある糸衣の片ちる小たや——ひ
 そすそとつ——と老翁の足知り傳るまや因は陰一歌
 女科紙持出く句以祢ぐま女の日我をけた歌の極女あり
 しは人のあまのまの形は傳るし先のあま——しは
 けと極女はま——を比羅彼の家因太の——とらるは
 あふとんはと句以新ひ新——し例ありしは事

蕉翁發句苗堀初編卷之四

冬之部

初一の終後も小の表とりけし

許六日云梅丸曰長協詩雖無箕畢期膚寸自成霖
 澤雉登龍唯寒猿擁條吟杜甫詩窮猿號雨雪老馬望關山
 其角が後の此叙小曰も句小疎の入さ心を差よ也欠と

るふ似るる一又曰只能語小禪の入るんは社をいつが
 翁の神の比 伊勢類 一山平一しつる自れ信よ小義
 と云せし能の神を入あひつるを忽ち腸のなりし
 と叫ひしあはれとる人き幻術とし云 梅九日多自れ
 魂しよと一句の切ある市をよ切者要也切要しつと
 一一句の所要多る市はいふ言と一句の切る市し心は
 る所し亦もわたり誤是より大あるはれ一一句の切る
 市を切字或る心切の市し并六日切字ありのや句此智
 傳授を他人推すふいりし傳授もも一も不念付夫

事子事傳授するるとし初ん此中平と切を好ふと能る
 不向あるものし傳授あを水をけ切字ありの句すこと
 宗匠の慈悲を初んより免一傳授すこと事なり
 傳授を他人推すやうとる能るしとる人並そのし
 必し容易な故事とす一初切字自由に入らる句を
 入まじ一と切字形一とる事あり何しと切
 事入まじつ不向好一とる句を一とる市を智れ伝
 一と切字形とる一とる一とる伝は又とる形も句不
 切字ありとる後とるものし一とる傳授の向ある

切字小つとく句ありぬ時此事を根え翁の意必と並
くの句此のものはわくは秀翁のすくは切字ありて
免しあふし九曰六極秘託ありて一も誤といは誤
と傳ふ人あまゝ為道為翁是非なく書ありてとを
けたり也免し一は後そふふへは秀翁は切字あり
とあるすく者本字が句小

仲間の垣込尾くぬる夕すすみ

此のひしは句切字も形く心切の句法中もわく原只一
句の魂は依く句とあけり切字百万ありて一も

魂あをけし死句とく句ふたゝぬしきとひ切字ありて
一句中魂すしきは活句とく句句く切字と是ま切字
ハ魂小わくは魂と邦小わく事とわくへ一依く三宗は
一句の切字と魂とくは魂と臆解と安説ありて一は
道破破る大慶説たりて事とわくへ一今此句は小の
とわくげこといへる也字と魂と心はを祖翁の純唱
子が辨論ありは泡とわくへ一故臨此句秋水とわく
さる事とわくは影くは為道為翁孰とわくは非を
る事とわくは又支字が續五論小曰

糸屋屏の雲は古きとを云ふ事

屋儀の序は句は魂のすつとて出たりとて魂とて
ハ行そめ一畧 已下具ふ事向の魂はとて論とて又解あり
ハ更なる令屏を松は古きとて屏を云ふ為今の時とて
積も小雲と魂とすつとて且つ去りおは實とてい白冊
子又滅しとい五論は實とてい風雅とていふ事魂は
之相ありと五老井が曲と行へん屋元坊が作と持た
せしもぬきそは事よりとて始とて及とて是とて
本ふよりなるへかたり又令屏の句は異あり略記

炭俵五論 師走傳

糸屋屏の松は古さうひや久くふりふり金

泊船 句選 類聚集

泊船句選とて小北と徒彼句陽のこふやふと集
炭俵五論小と水と雲と陰のくを縁の愛あると論と
るる一又赤舟子曰此句より一免ハ山と給とてふと
あり後ありとて

九くとてふと文乃が作あるとておとて一教一と作と論元

邪く指さるるを混する事なるは支るる二句以上の
花辭巧言を減するふく作くは言詞の巧く慮えが
作く指さるるのき句上の魂ましく作字ましく

よきくに岩吹くころ松ありけり

李夢陽詩 華嶽寒愈峻トリ

空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦

赤冊子曰の句除の句心は味といひくしく数日揚や去

空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦

支るる句也く空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦
も空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦
申の二句は空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦
梅凡回を命ハ歌ハくは是はくは合線梅も空
也く梅命ハ空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦
修ハ空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦も空也の瘦
是と句作せんとするは鍊之えく二箇のとも字を
又ハ句作せんとするは鍊之えく二箇のとも字を

と心の味しむふし心の相は泥どぐ必し情のつとるを
く一度一字小備^な活な情とと心味^上指^下趣向^{又目}之語^{趣意}な
まはるし志しむは一度一字まがハ趣向か^とと字のつまひ
たは句依の骨おるれを取自持と志する^と字のつまひ小
けと字の此^はひり^はまはる事と知る^つまはる^は念の^一平
終く^と物と指す^れを^を空也^は空^は體の對^ハ物^は空^は
伶哉^ハ一^と一^との^は活^はと^は活^はす^はは^は寂^は甚^は上^は此^は
一^と一^との^は又^は解^ハ小^ハ互^ハ思^ハを^ハ互^ハと^ハい^ハせ^ハ
此^ハと^ハ彼^ハと^ハ思^ハ一^ハ彼^ハと^ハ此^ハと^ハ思^ハと^ハ互^ハ思^ハと^ハ思^ハ

小今の句は瘦一字双^ニ關^ニ舞^ニ與^ニ空^ニ也是双関ありて互
思あり^ハ原^ハが^ハ説^ハ得^ハま^ハる^ハ又^ハ乃^ハ目^ハ小^ハま^ハ原^ハの^ハ句^ハと^ハ互^ハ見^ハ
と^ハも^ハし^ハ得^ハま^ハる^ハ彼^ハ目^ハ字^ハ双^ニ顯^ニ耳^ハ與^ニ口^ハ成^ニ双^ニ成^ニと^ハも
一^ハと^ハ一^ハと^ハの^ハ英^ハ俊^ハと^ハ一^ハ失^ハと^ハい^ハく^ハと^ハ思^ハの^ハ功^ハと^ハも
と^ハい^ハく^ハ也

雪^ハ以^ハま^ハの^ハ上^ハの^ハ額^ハ 獅^ハ也^ハ

額^ハ人^ハと^ハら^ハる^ハと^ハ不^ハ法^ハ後^ハ後^ハと^ハ一^ハ空^ハを^ハと^ハと^ハ向^ハと^ハ形容^ハせ
る^ハ座^ハの^ハあ^ハり^ハと^ハ不^ハ可^ハ到^ハの^ハ妙^ハあり^ハ画^ハ際^ハし^ハ乃^ハと^ハ思^ハ

いふゆゑ

ごは焼く〜も我あつる〜を我

法別下^ニ多他村^ノふふ^ノの^ニ焼く^ル 葵大田田^ノふ^ノハ
松原とご^ノふ^ノ事^ヲや^ル松原よ^ゴと^ヲ林^ノて[〜]あ[〜]は[〜]福[〜]
梅丸田^ノ福^ノ塚^ノの^ニ礼^ノ中^ニし^テ松原^ノ焼[〜]く[〜]は[〜]出[〜]り[〜]梅^ノは^ゴれ^方
本^ノ一^ノ箱^ノの^ニ昂^ノ感^ノ方^ノ言^ノ體^ノし[〜]を[〜]い[〜]一^ノ水^ノの^ニ生^ノは[〜]漢^ノは[〜]雲^ノ
美^ノ一^ノあ[〜]り[〜]し[〜]且^ノ地^ノは[〜]あ[〜]つ[〜]て[〜]の^ニ昂^ノ感^ノは[〜]変[〜]一[〜]く[〜]ご[〜]と[〜]吟[〜]
ト[〜]む[〜]一[〜]く[〜]あ[〜]り[〜]し[〜]は[〜]禮^ノは[〜]を[〜]さ[〜]り[〜]人^ノを[〜]あ[〜]つ[〜]く[〜]松^ノ原^ノと

し書^ノ示^ノ一[〜]あ[〜]る[〜]し[〜]あ[〜]る[〜]一[〜]此^ノ句^ノ松原^ノま[〜]り[〜]秀^ノ進^ノ之^ノ里^ノ終^ノ
と[〜]あ[〜]り[〜]し[〜]る[〜]林^ノ方^ノく[〜]名^ノの^ニま[〜]り[〜]の^ノ邪^ノ

小糸^ノ一[〜]く[〜]あ[〜]り[〜]一[〜]又^ノ松原^ノ友^ノが[〜]集[〜]し[〜]松原^ノと[〜]焼[〜]く[〜]
〜あ[〜]り[〜]又^ノ深^ノ川^ノ集^ノ中^ノ

不^レ乃^レハ^レ池^ノ裡^ノ新^ノの^ニ岩^ノれ^ノ由^ノ海^ノ市^ノ 芭^ノ蕉^ノ
ゴ^レ以^レ抱[〜]へ[〜]あ[〜]り[〜]土^ノら^レ此^ノ曲^ノ突^ノ ツツ井 酒^ノ堂^ノ

早^ノ崎^ノの^ニ園^ノと[〜]ん[〜]と[〜]や[〜]啼[〜]千^ノ鳥^ノ

嗚^ノ嘆^ノの^ニや[〜]し[〜]言[〜]す[〜]す[〜]心^ノあ[〜]る[〜]の^ニ悔^ノふ[〜]情^ノ一[〜]き[〜]海^ノを[〜]見[〜]け[〜]

吹_ニ枯_ニ葉_一

煙火_一_ニき_ニぬ_ニや_一涙の意_ニくる_ニる

ふ_ニの意_ニ新_ニし_ニな_ニ情_ニを_一入_ニ名_ニ嘯_ニ文_ニは_ニ在_ニ平_ニ
十_ニ回_ニは_ニ所

知_ルる_ニる_ニひ_ニぬ_ニか_ニる_ニ泥_ニ洞_ニも_ニ滞_ニる_ニる

い_ニは_ニ湯_ニ柳_ニの_ニそ_ニの_ニみ_ニり_ニふ

霜_ニの後_ニあ_ニぐ_ニと_ニき_ニる_ニ火_ニ桶_ニ哉

此_今も元_禰詩_後の_一字_子眼_とも_先も_きる_一 松_尾
註_ニに_一 _まね_の後_雷れ_あま_れある_とし_云 _云 _霜一_葉の_あま_れ
霜_後葉_を福_よく_云 _云 _似ま_が句_よ

ま_ねの後_葉れ_くい_ふを_{牡丹}

い_まし_まね_{あり}福_くう_う後_のま_し梅_よ火_桶繪_きる_一
梅_よし_似ま_が句_れい_まま_ねあり_一初_後も_うう_うい_ふふ_れ
ま_ねま_れ中_一ま_ね牡丹_の目_をぬ_くま_さへ_しく_いふ_いふ_う
ま_ね二十_日の_まね_れ自然_を稱_す一_一梅_よも_火桶_とい_ふも_ん
ふ_る牡丹_しい_ふる_左ふ_句あり_一ま_ねま_れ繪_きる_まね_は情_よき_足す_べし_べ

明あらし

芥根拔喫し

又又と證話す

武士此ち根苦き咄し、邪

寛治曰元禄六酉の年玄虎子亦武旅籠よ今此吟
之此句より一柳飛毛不掛口キ因休より之吟 梅九日大
根よ芥山^{えん}苦^きあるものし俗よ苦をむくしるし、るし一理
居いふべき肺のふとよとて成よ今の苦き此詞双関と家語
良薬苦口一忠言逆耳の對句し堅氣依り此忠言

良薬のそ水しとす物引く其人と称する句は苦口はそよ
又又の嗜みしものへ一逆耳は強くものへ又あつて極しは
くいふかきし一なまか死せれ人の耳は逆ひあやんと志
した笑ひが水を道にあつては、とくそ、とく解信ともしるを
く

いふ中け際その市小ちく難

鳥を倉おれしを倉おれな紙やゆびと際そのまよとてあ
ゆふぬあふしそこの境界わ一人かしかりや一人あつ

鯉き尾のこがたをせんとすしきくはなせふとい
 ちりりしるりと食むの境ふくまはらうとてはよ一と
 果して山登はるの歩る幸とてあつたるまの——はやふハ
 ぬの記おもふ—— 赤冊子回降回みの下のまこふ
 こそし丸回まきとてはなみかびとまぬは物か^{イナコ}北誌
 ちいさくみしおとくともぬすれとて海は上五
 け^{イナコ}物かある句に

振賣の序 乞ふる急いす講

け句を初の真さき成両家二十五條はまはれずいんるは
 兆し又系源の雨や西施が合飲のまをゆあると具といふ
 兆し早をえ生まゆゆをたてしとく光くぬく

蕉翁發句苗堀初編大尾

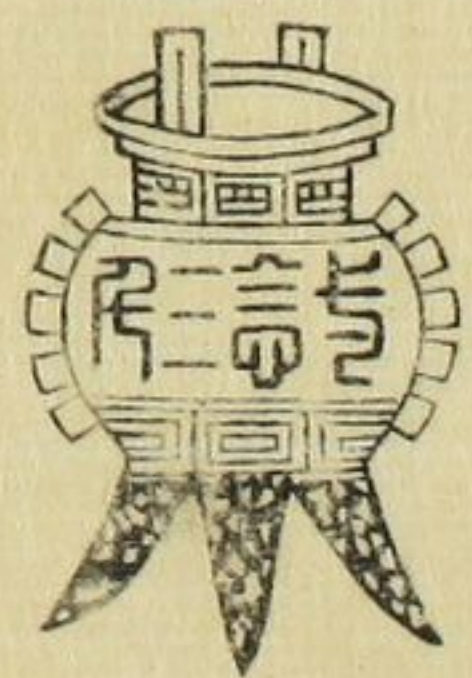
西堀跋

吾ら母の沙のまきとてきる日たしまふるあえ
 磨はふとぬり力のみきまのふと磨か
 弟うき集つるらさく此の母のまきとて
 し只をれこのみあわすやせし人をお
 するそとあらさきそはる中に西堀と
 歌るもあまをき歌のびとをとり免世はふ
 かこの句とをかこくに解きまわし

物よりふふまき言の條もまきとていふ
 来よりりも免てし一日記せどこのまきと
 くらぬきしちいふ中はたよかづのちと
 源へ世もたかやけはあしこもし印し
 やいふまきとていふはちとていふは
 まきとていふは此のぬるまきとていふは
 理つまきとていふは一糸とていふは
 於世はたをやし一まきとていふは
 まきとていふは一糸とていふは

あらずしるも命りて置はるる神の身
きこあしきぬき世の中はるる

不つと毫善を比立既解謹識



真
四